



エセンツ・フィルハーモニカー  
第1回 記念演奏会

2021.3.14 SUN 13:30 開演 (13:00 開場)  
所沢市民文化センターミュージック アークホール (大ホール)

# 国と県、両方のアプリを活用!

どちらも使うことで、一層の感染拡大防止効果が期待されます!

## 「場所」に注目!



### 埼玉県 LINEコロナ お知らせシステム

- 陽性者本人がアプリをインストールしてなくても、注意喚起ができる
- QRコードを読み取る行動が、感染拡大防止への意識向上につながる

施設やお店等に掲示してあるQRコードを訪問するたびにスマートフォンで読み取り、訪問日時を記録。



後日、その施設等を訪れた人が陽性となった場合、陽性者と濃厚接触した可能性のある方に対し、窓口への相談を促すメッセージをLINEでお知らせ。



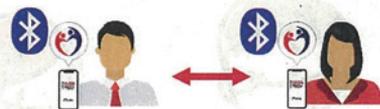
## 「人」に注目!



### 厚生労働省 新型コロナウイルス 接触確認アプリ(COCOA)

- アプリ操作により、陽性者との接触の有無を毎日確認できる
- アプリをインストールするだけで手軽に人との接触が記録できる

Bluetooth機能により、スマートフォン同士が近接した状態(概ね1m以内で15分以上)を「接触」として検知。アプリに記録。



アプリをインストールしていた人が陽性となった場合、陽性者本人がアプリで陽性登録。当該陽性者との「接触」記録がある人のアプリにお知らせ。



問 県感染症対策課

TEL 048-830-7502

FAX 048-830-4808

埼玉県のアプリ  
登録はこちら▶



問 厚生労働省

TEL 03-5253-1111(代)

厚生労働省ウェブサイトはこちら▶





# 埼玉県LINEコロナ お知らせシステム

訪れた施設などに感染者がいたことが分かった場合、注意喚起のメッセージを配信します。

まずは埼玉県LINE公式アカウント「**埼玉県-新型コロナ対策  
パーソナルサポート**」にご登録ください。



登録は  
こちら

## 登録後の利用方法

- 1 施設やお店に掲示してあるQRコードを、訪問するたびにスマートフォンで読み取ります。
- 2 読み取り完了メッセージが届けば、読み取り完了です。  
※初回のみ、情報取得への同意をお願いします。



施設やお店に掲示されたQRコード

## 感染者が発生した時

その施設やお店を訪れた方や従業員等が新型コロナウイルス陽性となった場合、その方と濃厚接触した可能性のある方に対して、**窓口への相談を促すメッセージ**をLINEでお送りします。



### 【お知らせ】

新型コロナウイルスへの感染が判明した方が、あなたが利用した施設を訪れていましたので、〇〇までご連絡ください。...

※メッセージはイメージです。  
※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

国の接触確認アプリ  
(COCOA)も活用してト



## ごあいさつ / プログラム

---

### 委員長 清水 颯太

---

皆さまはじめまして。本日はお忙しいところ、エッセツ・フィルハーモニカーの記念すべき第一回目の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

このエッセツ・フィルは新型コロナの影響がまだ及んでいなかった2020年1月頃に立ち上げられ、9月からの練習開始を想定して大編成演目のプログラミングを行ってまいりました。しかしながら不安定な社会情勢が続いたことで活動開始が11月にずれ込み、また当初予定していた大編成プログラムもステージ上の密の問題から変更を余儀なくされました。なんとも世知辛い世の中になったものです。

さて、当初の予定通りとはならなかったものの、本日お届けする2曲は言うまでもなくいずれもドイツロマン派初期を代表する名曲です。殊にベートーヴェンにとって2020年は生誕250周年という節目の年でした。これだけ時がたっても色褪せず世界中で親しまれていることには、感動を通り越して何か魂を揺さぶられるような感覚を覚えます。おめでとうベートーヴェン！

それでは、最後までごゆっくりお楽しみください



## 本日のプログラム

---

### シューマン

#### 交響曲第3番 変ホ長調 作品97「ライン」

- I Lebhaft
- II Scherzo: Sehr mäßig
- III Nicht schnell
- IV Feierlich
- V Lebhaft

———— 休憩 (20分) ————

### ベートーヴェン

#### 交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」

- I Allegro con brio
- II Andante con moto
- III Scherzo e Trio: Allegro
- IV Finale: Allegro

### エッセツ・フィルハーモニカー

2020年、一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。

現在、団員のほとんどが20代で構成されている。

団名に冠したエッセツ（独語:essenz）は「本質・真髓」といった意味を持つ。

初公演となる本演奏会では「ライン」および「運命」の傑作交響曲を演奏する。

### 指揮 齊藤 栄一

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間にわたり、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルク音楽祭などにて指揮。

82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲『ねじの回転』（関西初演）の副指揮者を務める。

84年には、一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成された水星交響楽団の常任指揮者に設立当初から就任。現在に至る。

水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共演で、佐多達枝振り付けのバレエ『カルミナ・ブラーナ』（95年、東京文化会館）、『ダフニスとクロエ』（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、『カルミナ・ブラーナ』のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの『トリオンフィ』3部作（4台のピアノと打楽器版に自ら編曲）を指揮している。また、作曲・編曲も手掛け、一橋大学管弦楽団創立100周年記念委嘱作品の『前奏曲』、『スーダラ節の主題による交響的変容』などの管弦楽曲のほか、『シンフォニエッタ』（金管十重奏曲）、『ミサ・プレヴィス』（無伴奏合唱曲）、バーンスタイン作曲『ウエスト・サイド・ストーリー』より『もうひとつのシンフォニックダンス』、TVアニメーション『赤毛のアン』エンディングテーマの三善晃作曲『さめない夢』の管弦楽版などがある。

現在、明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に、『往還する視線 - 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学』（近代文芸社）、『振っても書いてもしょせん酔狂』（水響興満新報社）がある。



# プログラムノート

## シューマン 交響曲第3番「ライン」

解説：山岸雄作

### 不安定な時代、未体験の領域

言うまでもなく、コロナ禍により我々の暮らしは激変した。IT 技術の革新等によりどうにか人間らしい営みを維持してはいるが、日々もたらされるニュースは全く未体験のものばかりで、極めて不安定な時代が到来していることを感じずにはいられない。

シューマンが活動していた時代の西欧世界もまた、変化の波に揉まれていた。「ライン」が作曲されたのは1850年だが、**1848年から起こった革命を、シューマンはドレスデンで目撃**している。同時にこの頃のドイツでは、イギリスから半世紀ほど遅れる形で**産業革命が急速に進行**していた。精神病を患っていたシューマンが、未体験の領域を生きる毎日から強烈に刺激を受けていたであろうことは、想像に難くない。

年	西欧世界	日本
1776	アメリカ独立革命	
1789	フランス革命	寛政の改革
1830	七月革命	天保の改革
1848	二月革命 「諸国民の春」	
1850	「ライン」作曲	
1853		ペリー来航
1867	北ドイツ連邦成立	大政奉還
1871	ドイツ帝国建国	

▲シューマン (1810~1856) が生きた時代

### シューマン史における交響曲第3番

こうした時代背景の中、シューマンは「ライン」という交響曲を描きあげた。作品番号は97番である。シューマンは番号付きの交響曲を第4番まで発表しているが、ここでの番号はあくまで発表した順番であり、**描いた順番で言えば第3番「ライン」が一番最後**である。

シューマンと言うとおそらく、ピアノ曲や歌曲の方がよく知られているだろう。《トロイメライ》と言えばピアノを弾かない方でもご存知かもしれない。また、同じくピアノ曲の《ユーゲント・アルバム》は、一昔前にあるお菓子会社のCMで使われていたこともある。

実際に、シューマンも初めのうちは歌曲やピアノ曲、室内楽曲を中心に描いていたが、1839年にシューベルトとベートーヴェンの墓を訪れてからは、**交響曲の作曲へ強い意志**を抱くようになっていた。「ライン」は、そんなシューマンの集大成とも言える作品である。

## 音楽史の結節点

この曲は、時に「**交響曲の最初の時代**」の終点」とさえ評される。ライン地方のカトリシズムを体現するかのような重厚なオーケストラの響きは、個人を超越した宇宙の神秘に近づこうとしている。

特に、第4楽章の後半で響きわたる管楽器全体によるロ長調のファンファーレは、対位法によるパッセージのなかに屹立する、言わば**"神の啓示"**である。これは、"ブルックナーの交響的境地を先取りしたものであり、シューマンがワーグナーの音響世界からさほど隔たっていない地点にまで到達したことを象徴するものだ"、とも言われている。但し、シューマン自身は生前、ワーグナーらの楽劇に対して基本的には批判的な立場にあったことが分かっている。



▲1850年頃のシューマン

## 各楽章の概略

さて、本題の「ライン」の説明に入ろう。この交響曲は5楽章構成である。



第1楽章冒頭の旋律

**第1楽章 (Lebhaft, 生き生きと、♩=66、変ホ長調)** は、ソナタ形式を取るが、主要主題による統一感が強い。この第1主題は、冒頭から強奏で鳴り響く。一見古典的な旋律だが、ヘミオラ風のリズム感からは躍動感が強く感じられる。楽章全体で、「力強さ」と「しなやかさ」が究極の融合を果たしている。

**第2楽章 (Sehr mäßig, きわめて穏やかに、ちょうどよく、♩=100、ハ長調)** は、スケルツォと書かれてはいるが、ゆったりとしていて、むしろ力強ささえある。当

## プログラムノート

初**〈ラインの朝〉**という副題をつけられていたこの楽章は、民俗的な要素**（ある種の”ラインらしさ”）**が多分に含まれている。実際、初演後の『ライン音楽新聞』ではこの楽章について、

「葡萄の樹々の緑が映える丘と  
友好的な雰囲気あふれる葡萄酒の収穫祭  
のあいだを進む、美しい船旅のようだ。」

との評がある。

3つの変奏曲が現れた後、すべてが遠くへと消えてゆく。



▲ライン川沿いのブドウ畑



第3楽章冒頭の旋律

**第3楽章 (Nicht Schnell, 速くなく、♩=116、変イ長調)** は間奏曲的な位置付けになる。途中で弦楽器が細かく上下に運動するが、全体は木管楽器を主体とする優美な旋律（随時”dolce”の指示がある）が包み込む。



第4楽章冒頭の旋律

そして、**第4楽章 (Feierlich, 荘厳に、♩=54、変ホ短調)** は、この作品の「**主題の重心**」を精巧に示していると言える。ケルンの大司教が枢機卿に加えられた時の儀式に触発されて、シューマンはこの楽章を追加した。当初「**厳かな式典への伴奏のように**」という添え書きがなされていた。なお、“人々に胸の内をありのままに示してはならない。芸術作品そのものの普遍的印象の方が彼らのためになる”として、シューマンは後にこの添え書きを削除している。



極めて厳肅な音形は、**宗教コラールのな雰** ▲ケルン大聖堂とホーエンツォレルン橋

**困気**を想起させる。シューマンはこの動機を一年半後に作曲した《レクイエム》にも長調で用いているが、ここでは「天にまします神よ」という言葉を当てている。

**第5楽章 (Lebhaft, 生き生きと、♩=120、変ホ長調)** は、再びソナタ形式で、明朗に進んでいく。展開部で第4楽章の主題が加わり、最後にはこの曲の全ての要素が集合し、**燦然たるコーダ**になる。先の音楽新聞には、

「皆が外へと駆け出して、思い出のうちにある陽気な夕べに歓びの声をあげる。」

とある。この強力な変ホ長調 (Es-Dur) の響きは、**運命の"扉"**の前へと我々を誘う。

## 「ライン」について

「ライン」という副題は、**シューマン自身が付けたものではない**。しかし、シューマンがライン川に対して格別の想いを抱いていたのは明らかであり、第1楽章から順に、ローライ、コブレンツ、ボン、ケルン、デュッセルドルフへと川を下っていく様子をイメージしているとも言われている。

ライン川の長さは1,320km、流域面積は約22万km<sup>2</sup>だという。長さについては信濃川の約3.6倍、流域面積に至っては利根川の約13倍にも及ぶ。水源は巨大なアルプス山脈系であり、我々が**想像する以上の規格**を誇っている。また歴史を紐解くと、はるか紀元前から重要な位置づけにあったことが伺える。

ライン川は、長きにわたり物質的にも精神的にも**西欧文明の中心的存在**であり続けていた。このような性質を持つ「ライン」を描いてこの交響曲を考えると、不思議なことに、「自然」

	ライン川の交通はローマ帝国建国以前から行われていた
紀元前50年頃	ローマ帝国が大きな橋を架ける 周辺都市が成長
～12世紀	流域都市がドイツの中心都市に ライン川は <b>最重要交通路</b> となる
13世紀以降	ライン川の交通に <b>関税が賦課</b> 盗賊騎士が現れることも
17,18世紀	航行自由化を協議するも難航
1831	<b>ライン川航行自由化</b> 輸送面で工業化を支える
～現代	世界有数の貨物取扱量を誇る 観光でも重宝される(川下りなど)

▲ライン川をめぐる歴史

## プログラムノート

---

に対して"人間"はどうあるべきか、というテーマが想起されるような心地になる。



▲ライン川



▲ライン川的位置 (Google マップ より)

### 音楽の座右の銘

シューマンは「ライン」初演の3年後となる1854年の3月にライン川へ身を投げ、精神を衰弱する。以後シューマンの筆が活発に動くことはなく、1856年7月、ドイツのエンデニヒ療養所で永眠した。

ところで、シューマンには**音楽批評家としての側面**もあった。実際、自らが創刊した『音楽新報』での批評で”新しい詩的な音楽の時代のために”様々な活動を行っていた。現代まで生きる「ベートーヴェン」崇拝の伝統を打ち立てただけでなく、シューベルト、ショパン、ベルリオーズらに光が当たるようになったのも、彼の功績によるところが大きいだらう。ブラームスをいち早く評価したのもシューマンだったという。

そこで最後に、そんなシューマンが遺した格言をいくつかご紹介したい。

一番大切なのは、耳（音感）を培うことだ。

小さい時から、音や調性を聴き分ける訓練をすること。

鐘、窓ガラス、カッコウ——何でもよい、音符に当てはめて聴きなさい。(1)

デュオやトリオなど、他の人と協演できる機会を決して逃さないように。

人とあわせると、演奏が流暢に、達者になる。

できるだけ声楽家の伴奏もしなさい。(30)

他の芸術や学問にも目を向けなさい。

自分のまわりの生活をよく観察しなさい。(59)

小銭で買える1ポンドの鉄から、  
10万倍も価値のある時計のゼンマイを何千と作ることができる。  
神から与えられた1ポンドの才能を大切にすること。(62)

天才だけが、天才を完全に理解する。(67)

勉強に終わりはない。(68)

これらは、1849年に作品68として出版された、前述の《ユーゲント・アルバム(子供のための小曲集)》の前書きとしてシューマンが自ら書いた”音楽の座右の銘”である。言葉の節々から、シューマンの**音楽への態度や人生観**が、ありありと浮かび上がってくる。

シューマンは、**優れた音楽家**であり、**偉大な哲学者**であり、**繊細な詩人**でもあった。昨今の凄まじい変化の荒波の中では、結果が見えにくいものや答えがはっきりしないものは敬遠される風潮にあるが、実際のところはむしろ、**我々の中にある音楽**こそが、**哲学**こそが、そして**詩**こそが、不安定な時代を人間らしく生き抜く鍵なのかもしれない。

参考文献：

遠山一行、海老沢敏編『ラルース世界音楽作品事典』福武書店、1989年  
遠山一行、海老沢敏編『ラルース世界音楽人名事典』福武書店、1989年  
帝国書院編集部編『最新世界史図説 タペストリー 十三訂版』帝国書院、2015年  
木下康彦、木村靖二、吉田寅編『改訂版 詳説世界史研究』山川出版社、2008年  
『日本大百科全書：ニッポニカ』小学館、2001年  
藤本一子『作曲家人と作品 シューマン』音楽之友社、2008年  
アルンフリート・エードラー(著)山崎太郎(訳)『シューマンとその時代』西村書店、2020年  
シューマン(著)吉田秀和(訳)『音楽と音楽家』岩波文庫、2007年

※本文中の画像の無断複製はご遠慮願います。

## プログラムノート

---

### ベートーヴェン 交響曲第5番「運命」

解説：菅野勇斗

---

本演奏会の最後を飾るのは、昨年生誕 250 年を迎えたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの傑作と言われる作品、交響曲第5番ハ短調 作品 67「運命」である。

#### ベートーヴェンについて～生い立ちと遺書～

---

ベートーヴェン家はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの祖父（紛らわしいことにこの祖父の名前も「ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン」）の代から現ドイツのライン地方で音楽家として定着していたようである。当時ボンに住んでいたこの家系に、ルートヴィヒが生まれたのは 1770 年、今から 251 年前のことである。

ルートヴィヒは幼少のころから音楽家としての厳しい教育を父から受けていた。といっても、これは彼が望んでのことではなく父が望んだものであって、ルートヴィヒはその苛烈な教育により、音楽に対して嫌悪の念すら抱いてしまうこととなった。しかし、12 歳となった 1782 年に、真の師匠というべきクリスチャン・ゴットリープ・ネーフェに出会うと、ベートーヴェンはその師のもと、才能を開花させていったのである。

その後、母の死とそれに伴う家族の混乱を経て、ベートーヴェンは 1793 年に生誕の地であったボンからウィーンへと移住し、本格的に音楽家として活躍し始めることとなる。

それから 9 年、交響曲第 2 番を書き終えた 1802 年秋、ベートーヴェンは本来の活動拠点であったウィーンから休暇先であるハイリゲンシュタットに移っていた。このころ、音楽家にとって最も重要な感覚である聴覚を失いつつあったことで、残酷な現実絶望し精神的に追い詰められたベートーヴェンはついに遺書を書くまでに至る。

ただし、遺書の中で「わたしを引き留めてきたのは芸術、それもただ芸術のみであった」（ブークーレシエリエフ :p233）とも書いている通り、彼は、死の淵に自ら進むほどの絶望とともに、芸術を通じた生への強い執念をも同時に抱いていたのだ。実際、その後すぐに彼は休暇先であったハイリゲンシュタットからウィーンに戻り音楽活動を再開し、交響曲第 3 番「英雄」をはじめとしたいくつもの作品の作曲活動に没頭している。そのうち、1806 年ごろから交響曲第 5 番の作曲に本



的に取り掛かり、「田園」の副題で知られる交響曲第6番と並行して筆を進めていった。

このように、ウィーンに復歸して以降精力的に活動に励む彼には遺書を書くほどまでに追い詰められた痕跡はほとんど感じることができない。しかし、以降の彼の作品に目を向ければ、危機によりもたらされた彼の心境の変化とその音楽への影響は明らかに見ることができる。その影響をはっきりみることができるものがこの交響曲第5番であるだろう。

### ベートーヴェンとハ短調の交響曲

---

ところで、この作品の主調はハ短調となっているが、ハ短調の交響曲はどうやらベートーヴェンにとって特別な意味を持っていたようである。ハ短調の交響曲のアイデア自体は1780年代から存在したようだが、実際に作曲を始めたのは交響曲第3番を完成させた後のことで、そのあとも交響曲第4番の作曲を優先するなど、かなりじっくりと練っていたようである。

加えて、同時期には同じハ短調やハ長調での作品を、室内楽やオペラの序曲などジャンルを問わず次々と完成させているが、この重要なハ短調の交響曲に向けた彼の並々ならぬ思いが感じられるようである。

かくして、この交響曲第5番は満を持して完成されたのである。

### 交響曲第5番「運命」

---

さて、ここで作品の細部へと話を移そう。

この交響曲はそれまでの交響曲の通例に従って4つの楽章からなる。

#### 第1楽章 Allegro con brio (4分の2拍子 ハ短調)

《提示部》



冒頭の動機（譜例1）

4つの音をフォルティシモで二度強烈に響かせる。クラシック音楽の中でもっとも有名なフレーズであると言えるだろう。この楽章のみならず作品全体に一貫して

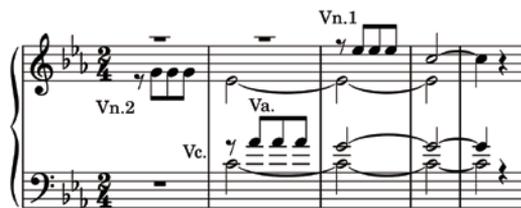
## プログラムノート

現れる重要な動機。この動機は8分音符3つの部分と2分音符に分けることができ、この2つの要素が独立してこの後何度も現れる。ここではこの動機を運命動機と呼ぶことにする。

ちなみに、この動機はキアオジという鳥の鳴き声に由来したものとされており、実際にこの鳥は、「同じ音程の短い音いくつか+それより低い長い音を1回」というこの動機にそっくりなさえざり方をする。



▲キアオジ



第1楽章第1主題（譜例2）

冒頭の動機の後、第1・第2ヴァイオリンとヴィオラが弱奏ながらも緊張感漂う雰囲気、運命動機をカノンのように積み重ねていくが、これが第1主題である（譜例2）。この作曲技法も、運命動機と同様に、曲全体を通して何度も現れる。主題の提示と確保ののち、推移部で緊迫感を増しながらクレッシェンドしていき、まず1度目のクライマックスとなる。



第2主題への導入（譜例3）

続いて、ホルンが第1主題と第2主題をつなぐ役割を持つ動機を演奏する（譜例3）。これは第1主題のリズムで第2主題を示唆する導入となっている。このような手法で2つの主題を密接に結びつけている点にベートーヴェンの創意工夫を見ることができる。

第1楽章第2主題（譜例4）

導入部ののち、第1主題とは打って変わって変ホ長調の静穏な第2主題が第1ヴァイオリンに現れる（譜例4）。しかし、まだ運命動機の材料は内声や低音部に現れ（譜例4赤枠内）、完全にはこの動機から離れられていない。

第1ヴァイオリンからクラリネット、フルートへと移り変わる形で3回第2主題が演奏されたのち、第2主題の推移部分となる。第1主題の推移同様、主題が上昇してクレッシェンドすることで段々と盛り上がり、提示部の2回目のクライマックスが形作られると、提示部が終わる。

#### 《展開部》

へ短調で運命動機が再提示されるのに続いて展開部が始まる。ここでも、運命動機の2つの要素と第1・第2主題のみを用いて展開している。

#### 《再現部》

再びハ短調で運命動機がトゥッティ（＝オーケストラ全体）で演奏されると以降は再現部となる。提示部に忠実な構成だが、一部は提示部と異なっており、具体的には、第1主題の再現部にオーボエのカデンツァが含まれること、第2主題がハ長調によって現れることである。特に、2つ目の特徴についてはこの作品で重要な調であるハ長調が初めて登場するという意味がある。

#### 《終止部》

終止部は、ほかの部分に比較すると運命動機と2つの主題の要素は幾分薄くなっていて、より自由な形の展開が多くみられる。しかしほとんど全体にわたって、再

## プログラムノート

現部終盤で形作られた勢いが維持され、短調ながら雄大な楽章のクライマックスとなっている。最後に冒頭から第1主題の初めまでが再現されるが、そのあとすぐに楽章が閉じられる。

### 第2楽章 Andante con moto (8分の3拍子 変イ長調)

この楽章は緩徐楽章として位置づけられる。



第2楽章第1主題 (譜例5)

冒頭においてヴィオラとチェロにより、牧歌的で美しい第1主題が提示される(譜例5)。この主題の最初の3音(譜例5赤枠内)が小さな部分動機となっており、この動機の展開によって第1主題全体が構成されている。この主題と最後の部分の繰り返しの後、木管群による新しい旋律とその展開によって主題の終止となる。

続いて、第2主題がクラリネットとファゴットによって演奏される。これも冒頭は第1主題の3音の動機が用いられている。この主題はファンファーレを思わせるような主題で、1度目に変イ長調で演奏された後、オーボエ・ホルン・トランペットによってハ長調に転じたものが輝かしく演奏される。

この提示部の後、第1主題が16分音符に分解された第1変奏、同じく第1主題が今度は32分音符となる第2変奏を経る。次に、ソナタ形式に準じた展開部、第1主題が木管群とヴァイオリンによるカノンのような旋律として再現される再現部と進行し、最後は第1主題の結尾部で閉められる。

第1楽章と同様に、この楽章でも楽章冒頭の動機が極めて重要なキーとなっている。また、1楽章冒頭の運命動機のパーツがこの楽章でも所々に用いられて存在感を主張しているので、演奏の中で皆さんにも見つけていただきたい。

### 第3楽章 Allegro (4分の3拍子 ハ短調)

第3楽章はスケルツォ楽章で、スケルツォ〜トリオ〜スケルツォとなっている。



第3楽章第2主題 (譜例6)

冒頭、チェロとコントラバスによるハ短調の分散和音と第1ヴァイオリンによる応答からなる第1主題が2度演奏されたのち、運命動機から派生した第2主題（譜例6）をホルンが力強く提示する。この第2主題は運命動機を4分の3拍子に当てはめた形となっており、冒頭では弱拍であった1音目が、ここでは強拍に位置する形になっている。

この2つの主題の展開によりスケルツォが進行すると、続いてトリオとなる。ここでスケルツォと同様チェロとコントラバスが提示する主題は、ハ長調へと転調しており、短調であったスケルツォと対照をなしている。

トリオとそのあとのスケルツォの再現を経た後、4楽章へむけたコーダの部分となる。弦楽器群とティンパニによるピアノシモの弱奏が導く不気味さから次第にクレッシェンドしていき、フォルティシモに達すると同時に楽章は4楽章へと移る。

## 第4楽章 Allegro (4分の4拍子 ハ長調)

第4楽章は再びソナタ形式で書かれている。



第4楽章第1主題（譜例7）

この楽章になると、ピッコロ・コントラファゴット・トロンボーンがオーケストラに加わる。これにより冒頭のハ長調の和音と第1主題（譜例7）はより力強く輝かしいものとなっている。

この楽章においても運命動機はしっかりと表れており、具体的にはト長調に転調して演奏される第2主題の2回目においては、木管群の旋律の裏で、金管群とティンパニが3連符と4分音符からなる運命動機の断片を演奏している。

展開部と再現部の間にハ短調で書かれた3楽章のスケルツォの第2主題をもとにした回想が少しの間挟みこまれるものの、楽章のほとんどが長調、特にハ長調によるものであり、これまでハ短調主体であった曲の雰囲気大きく変えている。

コーダで加速して presto に至るとフィナーレへ向けて最後の盛り上がりとなり、再び第1主題の断片を演奏するところで絶頂となる。そのあと、何度も執拗に楽章の主調となったハ長調の和音を念を押すように畳みかけ、全曲が閉じられる。

## プログラムノート

---

### 調の動揺と絶対音楽

ここまで見てきたように、この曲の調はハ長調とハ短調の間で揺れ動き、曲後半になるにつれ長調が支配的となっていく。具体的には、前述した通り、1 楽章は主に短調であるのに対し、1 楽章再現部後半や2 楽章に3 回現れるファンファーレはいずれもハ長調で書かれている。さらに、3 楽章のトリオは全体がハ長調で演奏され、アタックで（=間をあげずに）つながる4 楽章冒頭のハ長調の3 つの分散和音が自然な帰結として現れるための導入の役割を果たしている。その後4 楽章において3 楽章が再現される部分でのハ短調は最早短調と長調の争いがあったことを思い出させるにすぎず、長調の完全な勝利を示すこととなっている。

この特徴は、「暗から明へ」、もっと詳しく言えば「明と暗のせめぎ合いののち、最終的に明が勝つ」という非常にシンプルかつドラマチックな曲展開をそのまま表している。動機の徹底した展開を試みているという構成面の特徴からこの作品は絶対音楽を極めたものだといえるが、何かしらの流れを巧妙に示唆しつつ曲に触れる者に自由な解釈の余地を与えているという点でもまさに絶対音楽の模範だといえるだろう。

余談とはなるが、先の見えない今の時代は上で述べた「明と暗のせめぎ合い」にまさに重ね合わせることができよう。我々も、今日この演奏会を開催するまでの1 年間、コロナ禍に振り回され様々な紆余曲折を経てきた。そして厄介なことに、音楽とは異なり、この「せめぎ合い」はいつまで続くかわからないものでもある。しかし、「明けぬ夜はない」という言葉もある通り、いつかは必ず「せめぎ合い」に終止符が打たれ明が暗に勝利する時がやってくる。大袈裟過ぎるかもしれないが、今の苦闘を作品に重ね合わせ、いつとは知れぬ光への希望を、この演奏を通じて皆様と共有することができれば幸いである。

#### 参考文献：

アンドレ・ブークレーシェリエフ（著）西本晃二（訳）『《永遠の音楽家》2 ベートーヴェン』白水社、1968 年

諸井三郎「解説」『ベートーヴェン：交響曲第5 番 ハ短調』全音楽譜出版社、2015 年

Barry Cooper 'INTRODUCTION' "Beethoven Symphony No.5 in C minor"  
Bärenreiter-Verlag Karl Vötterle GmbH, 2001

# エッセツ・フィルハーモニカー

常任指揮者：齊藤栄一

コンサートマスター：小染 慶

## 第1ヴァイオリン

池田健峰  
岩渕百恵  
奥野大志  
落合友佳里  
◎小染 慶  
小林健人  
笹川 萌  
田代 新  
日比俊太  
村部一星  
森 勇人  
山本雪菜

## 第2ヴァイオリン

荒金香帆  
岡村昴洸  
片岡拓巳  
小池拓人  
佐藤直人  
◎鈴木満理奈  
砂川 湧  
田村奈津子  
日比茉優

前澤郁弥

## ヴィオラ

大澤愛紬  
岡本理咲  
落合純一  
木下和香奈  
高岡広太郎  
高橋 熙  
土谷夏仁  
野澤祐友子  
◎宮崎春菜

## チェロ

石井素晴  
大久保雅子  
荻原理奈  
◎加藤碧子  
金澤直人  
小林桜子  
吉海拓真

## コントラバス

上野未夢  
上岡拓未

鈴木和奏  
盛田あや  
◎和田輝羽

## フルート

今城琴美  
◎小川真央  
福永勇希

## オーボエ

秋葉晴香  
◎菅野勇斗  
黒川達郎  
山本菜緒

## クラリネット

小林桃子  
田中秀和  
◎山岸雄作  
山根祐真

## ファゴット

野口滉太  
◎萩田智樹  
福島知浩

## ホルン

池水香穂  
大場祐香  
片山銘弥  
◎清水颯太  
満石卓斗

## トランペット

岩本紗弥子  
倉林佳祐  
◎戸辺悠大  
畠山華子

## トロンボーン

石井志歩  
◎青木俊輔  
柿沼葉里  
鈴木亮太郎

## パーカッション

安西理玖  
◎高良佑佳

(◎: 首席奏者)

## トレーナー

林 憲秀

## デザイン

水本紗恵子

## 運営委員

委員長:清水颯太  
会計:野口滉太  
楽譜:宮崎春菜  
運搬:高良佑佳

録音:高岡広太郎  
チケット・WEB:菅野勇斗  
パンフレット:小染 慶  
受付・感染予防:小川真央

会場:菅野勇斗  
小染 慶  
山岸雄作